

定置網漁業の管理に関する研究

(多角的資源管理型漁業の推進に関する研究)

(予算区分 交付金 研究期間 平成15～18年度)

担当：水産試験場伊豆分場

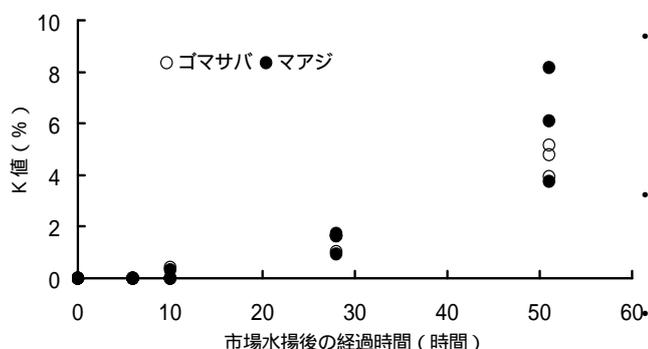
【研究の背景とねらい】

- ・ 定置網漁業は、元来ブリ親魚を漁獲対象としてきましたが、漁獲量の低迷などにより網の目合いが縮小され、それに伴い幼稚魚の混獲が問題となっています。
- ・ また、漁獲物の鮮度維持等による質の向上や漁業経営コストの削減が望まれています。そこで、量・質・コストを一体とした取組みにより適切な資源管理型漁業実践のための方策を提言します。

【研究成果】

15～17年度の成果

K値は、鮮度を示す値のことで、小さい値ほど鮮度がよいとされています。

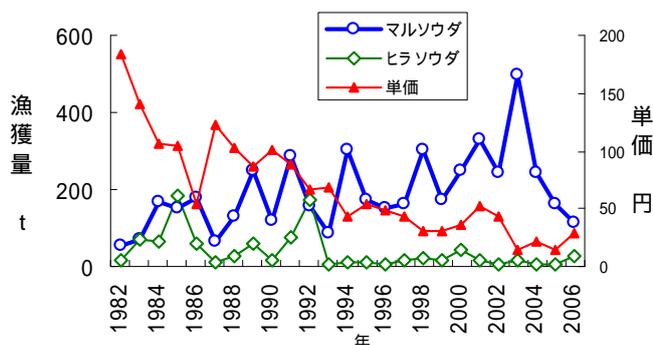


冷海水使用漁場における漁獲物の鮮度 (K値)

- ・ 冷海水使用漁場の漁獲物の鮮度は、水揚後約2日経過しても十分な鮮度を保っており、氷の使用量が少なく、魚船の水温変動も小さい傾向がありました。
- ・ 大量に入網した魚種は一時蓄養して出荷することで魚価が向上することから、蓄養出荷は漁業経営改善にも有効な手段と考えられました。定置網において、様々な魚種の幼稚魚が自主的に放流されていました。
- ・ 漁獲物輸送時も保冷コンテナ等で低温管理されていました。

18年度の成果

- ・ 鮮魚となるヒラソウダが減り、マルソウダが増え、単価は低迷していました。
- ・ マルソウダは節原料となるため、小型のものが量的にまとまるほど単価がよくなりました。
- ・ サバ類の単価は全国的漁獲量の影響が大きく、マアジの単価は伊東市場が全国水準を上回る単価となっていました。
- ・ 夏期には市場での扱いによりマアジの鮮度に影響が出る可能性があることがわかりました。



伊豆東岸大型定置網8ヶ統のソウダガツオ類漁獲量と伊東市場における単価

【研究成果の普及方法】

普及事業の中で引き続き調査を実施し、逐次その成果を普及します。

(作成 平成19年3月)